

## 仏教音楽：生命(いのち)の流れとひびき

著者	渡邊 顯信
雑誌名	真実心
号	15
ページ	1-21
発行年	1994-03-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000567/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000567/</a>

## 仏教音楽

——生命いのちの流れとひびき——

渡邊顯信

ただ今学長先生からご紹介をいただきました渡邊でございます。実は、三十数年前に学生仏教音楽研究会というのが京都にございました。大谷派関係校として、大谷大学と光華女子大学（当時は短期大学だけでした）が加盟しておりまして、私も一緒に活動していました。そのころは、西京極で阪急電車を降りますと、光華学園は田圃や畑のなかにあり、いまのようなアスファルト道ではなく地道でした。その曲がりくねった地道を歩いて光華に伺ったことを覚えております。先日、久しぶりに阪急でこちらに伺いましたが、直角、直角に曲がる道、それもアスファルトの道に変わっていきまして、確かに三十数年という年が流れたことを思わされたことです。

ただ今から議題に沿ってお話をさせていただきますのですが、私自身、実は仏教音楽について十分に調べている研究者ではありません。ただ、自分が好きであったし、仏教音楽に救われたという事実が生きていくための大きな支えになっております。本日は皆さんの貴重な時間を頂戴することになりましたが、皆さんの手をわずらわさないように、レジュメを用意いたしましたのでご覧ください。中身は、起承転結の形をとり、ⅠからⅢまでは、Ⅰ『はじめに』、Ⅱ『仏教音楽の歴史』、そしてⅢ『仏教音楽の現状』としまして導入部に当て、最後のⅣ『むすび・仏教讃歌演奏』を今日のメインにいたしました。つまり、皆さん方にもいっしょに仏教音楽にふれていただくことが主たる課題なのであります。ですから、主役は皆さんで、私たちはそのお手伝いをするということになります。

ところで、光華女子学園の理事長・学園長でいらっしゃる阿部恵年先生、大学の事務局次長の四辻先生、この方々は学生時代の合唱団の仲間、私はこのような方々に支えられて男声合唱というものを学ばせていただきました。普通は、合唱をするようになりますと、声のきれいな方、美声でなければならぬということを感じられるのですが、その範疇から考えますと、私はまったくの落ちこぼれです。美声も持ち合わせておりませんし、音楽性も非常に粗末なものです。

その落ちこぼれの私が、なぜいまここに立たせていただいているか、これは非常に不思議なことです。非常に有難いことです。つまり、人間にはいろいろな性質や性格がございます。しかも、それが音楽ということになりますと、普通ならば技術なり声なりを持ち合わせなければできないように思われます。そうしますと、私はまったくの失格者なのです。ところが、いろんな先生方、いろんな友人の方々から教えられましたのは、落ちこぼれなら落ちこぼれなりにたせる役割があるだろうということでした。それが少人数の合唱団の場合は、声を出さなくてもすむ役割、つまり指揮者でした。美声を持っている人が指揮者になりますと勢力が半減しました。そういう意味で、美声でない者が指揮者になるというのが、私の場合のまさしくパターンでした。声のない者なりに、落ちこぼれなりに、いろんな先生方のお話をうかがって、あるいは音楽のひびきにふれて、少しづついつのまにか仏教音楽から離れられなくなり、私のライフワークといってはなんですが、そういう思いに深まってまいりました。そういうわけで本日は、いささかお恥ずかしいのでありますが、自分の経験したよろこびをぜひ皆さんにお伝えしたい、知っていただきたいと思って参上した次第であります。

音楽 教 仏

それでは、レジュメのⅠ『はじめに』に入りたいと思いますが、最初に仏教用語の若干につ

いて、大切なところを確認しておきたいと思います。まず初めに、《無常》という言葉があります。「すべての事象は常なるものではない」ということですが、皆さんは無常ということについてどのような感覚を持たれるでしょうか。普通ですと、無常といいますと、たとえば花の場合、萎びていくとか、散っていくとかということになり、人間の場合ですと、老化現象、年を取っていく、力も気力も衰えていくことであって、つまりは消えていくもの、そのような印象をもちます。これも確かに無常の一面です。しかし、視点なり、発想を変えてみますと、たとえば花の場合、何か種を播きます。そのときはきっと花が咲いてほしいと願うはずで、芽したときのよろこび、どんどん成長していくよろこび、花が開くよろこび、これもまさしく無常です。人間の場合でも、子どもが生まれるとわかったときの両親のよろこび、ちょうど十数年前、皆さん方のご両親もそのよろこびを持たれたわけです。そして無事生まれたとなると、さあ耳が聞こえるだろうか、手が動くだろうか、そのうちに、いつはいはいするだろうか、いつ掴まり立ちするだろうか、いつ一人で歩くようになるだろうかと、非常に積極的な気持ちで皆さんを育ていらっしやっただけです。これは現在の皆さんも、あと数年たてば、ご自分で確実に実感されるであろう事実です。しかも、それはかなり嬉しい実感になるはずで、これ

も無常なのです。anitya と書きますが、常でないもの、つまり生きるということの特徴で、成長するということでもあります。ただ残念ながら、インドでいわれました無常観というものが、日本の場合、奈良・平安という時代を通して、あまりにも文学的にみられすぎました。特に、移ろい行くものとか、侘しさ、悲しさ、はかなさ等の表現のみが強調されてしまったのです。そういう意味からも、この無常ということをもう一度、視点を変えてみられることをおすすめします。

二つ目に、《縁起》という言葉です。これは「すべての事象は、種々なる要素が集まって生じている」ということです。prāṭhya-samutpāda と書きますが、最初の prāṭhya といいますのは、「何々に向かってゆく」という動詞の変化したもので、縁、「何々によって」と訳します。saṃ というのはいろんな要素を集めるという接頭辞で、utpāda といいますのは、「生ず、生じたもの、生起したもの、出てきたもの、生まれたもの」という意味をあらわしますから、「いろんな要素が集まり縁って現在ここにあるもの（こと）」、「これが縁起です。ちょうど今日も千人近くの方がいらっしゃって、私どもも参加して、宗教講座があるということ、これも縁起の理法の一面でもあります。

この縁起の理法のなかで私たちは生かされてまいりました。そして、今後も生かされていくだろうと思います。その場合に、常に「調和」を求めながら生きていくのが私たちの今後でありましょう。「調和」ということを音楽用語でいいますと、ハーモニーです。やわらぐ心、聞き合心、それがハーモニーです。それを求めながら生きていくのが私たちの今後だろうと思います。

三つ目に、《苦》、苦しみという言葉です。これはどちらかといいますと、物理的な、あるいは生理的な苦痛の場合が多いのですが、それ以外に、自分が心理的に期待が充足されなかった、こちらの一方的な思いが充足されなかった場合も苦痛を感じますね。条件はいっしょなのですが、受けるほうの受けとめ方が違うだけのことです。そのことについて仏教では、四法印、あるいは三法印ということがいわれます。レジュメに「諸行無常」という言葉を出しました。あるいは *sarva-samskāra anityah* といいますが、*sarva* と「一切」という意味です。 *samskāra* といいますのは、作られたものという意味です。つまり、すべてのものは作られたもので、はじめから常としてあったものはない、すべては無常であるということです。

それから最後には、「一切皆苦」という言葉があります。初めに *duḥkha* とありますが、

「諸々の苦」ということです。つまり、「一切の苦は、すべて作られたものである」ということです。これを逆にみますと、人間の生きていく勇氣が湧いてきます。このことをいまから二二六〇〇年ぐらい前に、ゴータマ・シッタールタという方が気づかれて、ゴータマ・ブツダになられました。その釈尊の伝記につきましては、学園で作られました『聖典』（歴史編一三二頁）一六四頁）に書いてあります。どうぞ、熟読してみてくださいと思います。

次に《仏教と音楽》という項目を出しておきましたが、ゴータマ・ブツダ、釈尊は音楽をどういうふうに見ておられましたでしょうか。その事例を経典にみますと、漢訳経典の「長阿含経」に『釈提桓因経』がありまして、そのパーリ語の原典に、*Digha-nikaya* の『帝釈所問経』があります。少し読んでみますと、

パンチャシカよ、いま、汝の〔弾いたベールヴァ製の黄色いヴィーナ(七弦)の〕弦の音は、〔汝の〕歌の音色と調和し、歌声は、弦の音色と調和していた。しかも、パンチャシカよ、〔汝の〕その弦の音色は、歌の音色に勝らず、歌声は、弦の音色に勝ったものではなかった。ここは非常に大事なところだと思えます。パンチャシカがヴィーナを弾きながら歌ったわけです。歌がまさったのではなく、楽器がまさったのではなくて、それが調和していたということ



です。これはすばらしい世界です。それを釈尊は讃えられました。つまり、そのような音楽を釈尊は大事にされていたのです。ただし、実際に退けられた歌舞音曲もあります。それはどういうことかという点、いまのような調和した音楽ではなく、乱れたり、日常生活や精神生活を妨げるような音楽で、そういうのは非常にきびしく否定され、退けられました。

釈尊が亡くなられた直後に、「結集」〔經典の編纂会議〕が開かれました。結果はサンスクリットでは Saṅgīti といいます。これは先ほど申し上げた Saṃ といっしょで、いろんなものが集まって、Ga. 歌うという動詞からできた言葉で、「いろんな人たちが集まって歌い合わせたもの」ということで、これが結集の本来の意味であります。それが実は仏教音楽の基本姿勢になっているのです。釈尊の教法というのは口頭でしか伝えられませんでした。つまり、紀元前四、五世紀の時代ですから文字はなかったのです。日本でも『古事記』などは口承、口伝で伝わっていましたが、そういう文字がないなかで、釈尊が亡くなったあと、口承で伝わっていた釈尊の教法を確認し合ったのが結集、仏典の編纂会議でした。それはだれかボスのような人物がいて、独善的にこうだと決めたのではないのです。いろんな人が集まって、確認し合って決めたのが仏典なのです。この姿勢はまさしく民主主義の基本であります。力のある者、権力者

が決めたのではなくて、皆で決めたということですよ。これはまさしく「自覚や自覚めの宗教」といわれる仏教の大きな特色の実例だと思えます。

次に『仏教音楽の歴史』について若干申しておきます。時間の関係で少しはしよりますが、  
積尊時代には文字はありませんし、もちろん録音機もありません。そういうなかでの音楽的な環境といえますと、インドの場合には、バラモン教のヴェーダ、ヴェーダということは高校時代の教科書にも出ていたと思いますが、リグ・ヴェーダとかヤジュル・ヴェーダとかという聖典を朗読する、唱和することでありました。積尊もそういうなかで育っていらっしゃいます。

その後、仏教の最盛期を迎えますと、皆さんもご存知のアショーク王の時代（紀元前三世紀）から九世紀ぐらいまでの間ですが、その時代の仏教遺跡としてサーンチーヤガンダーラ、アジャンター、エローラなどがあります。皆さんもお聞きになったことのある地名ばかりだと思いますが、そこに実はすばらしい作品が遺されております。音楽関係の描写の部分もござります。

仏教は紀元前三世紀頃にスリランカに伝わってまいりますが、スリランカでは上座部仏教という初期の形態が現在でもつづいております。スリランカにはパーリ語による仏典が伝承されているのです。その中から二つほどの文章を書いておきましたが、その一つが「三帰依」であ

りませう。

Buddham saranam gacch mi

ブッタン サラナン ガッチャーミ

Dhammam saranam gacch mi

ダンマン サラナン ガッチャーミ

Sangham saranam gacch mi

サンガン サラナン ガッチャーミ

これは釈尊時代と同じままであります。私の小さいころに、漫画の本に「ナムカラタンノート ラヤーヤ」と呪文のようなものを書いてあったことがありました。大きくなって調べてみますと、それは Namah ratna-traya<sup>や</sup>で、漢字の音写が「南無喝羅怛那 羅夜野」ということであつたのです。トラヤーヤというのは「三つに」ということで「佛・法・僧の三法に」ということです。ラトナは宝ですから、佛・法・僧の三つの宝に南無する、帰するということであつたのです。小さいころに耳にした音はなかなか忘れられないものです。

次に『法句経 (Dhammapada)』というのがあります。そこに

まことこの世では、怨みによつては怨みは決して消える(しずまる)ことはない。怨みより離れてこそ消える、これが永遠の真実(教法・基本)である。

という文章があります。この言葉は、実は皆さんにとつても大切な言葉なのです。一九四五年

八月十五日に第二次世界大戦が終了し、その戦争責任が日本に負わされました。その数年後、一九五一年（昭和二六年）にサンフランシスコで対日講和会議が開かれたのです。普通ですと、敗戦国に対して関係諸国から相当額の賠償請求があるものです。ところが、これはぜひ皆さんに覚えておいていただきたいことですが、スリランカを中心として何か国かが日本に対する賠償請求権を放棄してくれました。そのときの演説のなかで、ついこの間までスリランカの大統領であったあったジャヤワルデネさんが、このダンマパーダの文を引用しながら賠償請求権放棄のスピーチをされました。これは日本にとって非常に友好的な有難いことでした。

仏教音楽は、その後、東南アジア、チベット、中央アジアと伝わっていきます。それぞれの特徴は後ほどでもレジュメでご覧いただくとして、それが中国を経まして日本へ入って来たものが、2の《声明》であります。サンスクリットでは Sabda Vidya とで申します。Sabda というのは音ということ、Vidya は Vid という「知る」という意味の動詞から出た言葉で、明らかにするということの意味です。ですから、言葉の意味、言葉のひびきを明らかにする、それが Sabda Vidya で、バラモンの必須科目の一つでありました。ご覧のように五つあります仏が、その一つひとつについて申すことは略します。

その日本での展開ですが、記録によりますと、仏教伝来当初の奈良時代にインドからバラモン僧がこられているのです。その方が菩提僣那 Bodhisena であります。そして、七五二年に東大寺の大仏殿での開眼法要のお導師をなさっているのです。その時に出了言葉はきつとサンスクリットであつただろうと思います。残念ながら、その実際の文字は今のところはつきりしておりません。その時にもう一人、今のベトナムの国から佛哲という方がこられています。この方は舞楽といったものを伝えられた方であります。われわれは日本の文化はすべて中国、そして朝鮮經由、いわば漢字文化圏經由で入ってきたものだけを基礎にしていると思いがちですが、実は、それだけではなく、海路からも若干の原典、あるいはそれに近いものが入ってきているのです。そして平安時代から現代まで伝承されているわけですが、この声明について詳細を申しますと、数時間あつても足りませんので、省略させていただきます。

ただ記譜法についてだけ少しふれておきたいと思ひます。これは音譜を記録する、音譜の書き方ですが、それを声明の場合は「博士はかせ」といい、音譜とはいわないのです。その「博士」は大別して三つに分かれます。まず「古博士」、これはいわば古い博士で、サンスクリットの音をそのまま漢写して表記する記譜法のことであります。次に、「五音博士」、五つの音です。日

本を含めて東南アジアはだいたい五音音階ですから、五音音階が中心になって楽譜が記載されていきます。そして三つ目が古博士と五音博士をミックスしたもので、「目安博士」といいます。目安をつけるというふうに使われる目安であります。音の位置なり、長さなりを記号で表します。それが目安博士なのです。この三つが記譜法で、決して音譜とはいいません。

声明についてはさらに細かな分類がありますが、時間の関係で省略いたしましたして、導入部の最後であるⅢ『仏教音楽の現状』について申しておきたいと思えます。まず、近・現代のあゆみについて簡単にふれておきます。時代によりまして仏教音楽の名称にずいぶん変わりがありまして、最初は仏教唱歌といっています。讃仏歌とも仏教讃歌とも、あるいは仏教聖歌、讃仰歌ともいうように、いろんな呼び方がありますが、その定義についてはまだまだ検討しなければならぬものがあります。

仏教音楽 明治時代にはじめて西洋音楽が日本に入ってきましたが、明治五（一八七二）年に学制が制定され、義務教育の制度が決められて以来、音楽教育の指導法をめぐって西洋音楽と日本音楽との葛藤の時代が大正時代までつづきました。そういう流れを通して現在の日本の音楽教育が成り立っているわけです。大正時代には大正デモクラシーという風潮の中で、仏教音楽の成長期と

いえる時代になりました、数多くの良い作品が作られております。昭和に入りましては、驚くべきことに、昭和三年、文部省のなかに「仏教音楽協会」が設立されているのです。東本願寺とか西本願寺ではなく、文部省のなかになのです。これは非常に大事なことでありますし、その理事やら評議員になられた方には、著名な作詞家・作曲家といった方々が入っておられるのです。そして、仏教音楽協会の創作発表会というのが昭和四年から毎年、十一回ほど開かれ、一七〇曲ほどの曲が発表され、楽譜が出版されているのです。小さくておわかりにならないと思いますが、今日ここにその縮刷版等、教冊の出版楽譜を持ってきました。「第一回発表 懸賞選歌並びに曲」という形式のこの楽譜は、昭和四年に文部省から発行されています。『花祭の歌』と「朝な 朝なに仏教仰ぐ」という詩の『朝の歌』が入っています。これは今でも歌われ、特にお西のほうでよく歌われています。それから、第二回は少しハードカバーになりまして、十一編の歌が入っています。このなかには「仏教青年会会歌」とか、『讚仏』等が入っています。こういうものが戦争直前の昭和十五年までつづきまして、一七〇曲ほどの歌が発表されているのです。

それから、戦後のあゆみですが、まず、仏教系の大学、竜谷大学・京都女子大学・大谷大学・

光華女子短期大学の活動が復活してまいります。そして、昭和二十八年に「京都学生仏教音楽研究会」が結成され、十年ほど活動しました。その数年前の昭和二十二年に「大谷楽苑」が、先日お亡くなりになりました大谷光暢ご門首、そして四年前に亡くなられた智子裏方のお二人の発願で発足しました。これは敗戦という大きな痛手をなんとかしていやしたいという願いからのことでありました。そして、昭和二十二・三年には作詞を公募する形式で十曲の作品が作られました。その第一曲目が「みほとけは」であります。時代の先端をリードしたという意味でも大谷楽苑の仏教音楽に果たした役割は非常に大きなものがあります。その後、昭和三十六年には親鸞聖人の七百回忌が勤められました。その時に「大谷派合唱連盟」が結成されています。それからお西のほうでは、「仏教音楽研究所」の前身の研究会が昭和三十六年のご遠忌を契機に発足しました。このようにいろんな機関がありますが、実際に作中としましては、レジュメのように蓮如上人の四百五十回忌の時の作品、親鸞聖人の七百回忌の時の作品、そして誕生八百年の慶讃法要の作品、そういったものがそれぞれの作詞家・作曲家のご協力できています。

## 仏教音楽

最後に、仏教音楽の果たすべき役割や目的はいったい何であろうか、その辺を少し考えてい



ただければと思います。レジュメには「心から心へ伝わらんことを」と書いておきましたが、結論的に申しますと、「仏教音楽とは縁起の理法の実践の場」ということだと思えます。調和する、ハーモニーさせていく、その方法や心のあり方を学び、実践していく、訓練していく場所、言葉を換えますと、人格を深める場所、それが仏教音楽の場であり、役割だと思えます。この本質的な表現を私は数人の方々の言葉に感じましたのでレジュメに紹介してみました。まずベートーヴェンは晩年最後の大曲『荘厳ミサ曲』の一曲目、「キリエ」の冒頭に走り書きで、次のように書いています。

Von Herzen — Möge es wieder — zu Herzen gehen.

拙訳してみますと、「心から——そして再び——心へと傳わらんことを」ということになりましょうか。ベートーヴェンの場合は「神の心から自分の心へ」であったのかもしれませんが。そして、「自分の心から演奏する人の心へ」であったのかもしれませんが。それはまさしく「音楽の心とその本質的働き」だと思えます。「結果」が共に歌い合うことであることは先ほど申しあげました。仏教のテキストを作った中心には共に歌い合うという姿勢があったのです。また、金子大栄という先生は「お浄土は音楽の世界ですよ」とおっしゃってくださいました。音楽

されるお浄土というのは、向こうのほうにあるものではなくて、たとえば、この講堂のなか、ここがお浄土にもなりうるのだらうと思います。それはかかわっているわれわれの姿勢次第だと思えます。姿勢次第でお浄土にも近づき得るのです。そういう意味で、音楽の世界はどこにでも存在し得ると思います。

次に、「抱かれて ありとは知らず 愚かにもわれ反抗す おおいなる御手に」。これは大正時代の典型的な美人で、才色兼備だったといわれます。九条武子夫人の作品です。また、安田理深先生は「本当のものがわからないと 本当でないものを本当にする」といわれました。これは正しい伝統のなかに自分がありながら、その伝統や本当のものを知らないだけに、知らなかったことに対して無感覚になっている自分に気づかされた実感なのでしょう。これは本当に恥ずかしいことだと思います。実際には、私たちの周囲に本当のものが満ちあふれています。そのなかから何をどのように見つけますか。先生方、友人たち、いろんな方の力に支えられて何を見つけたことができるか、それが私たち生きていく人間に与えられた命題であり、それぞれの課題であると思います。

音楽教 仏

最後に、相田みつささんの「自分の番」という詩を読んでみましょう。

自分の番——いのちのバトン

父と母で二人

父と母の両親で四人

そのまた両親で八人

こうして数えてゆくと

十代前で一〇二四人

二十代前では……………?

なんと百万人を超すんです

過去無量の

いのちのバトンを受けついで

自分の番をいきている

それがあなたのいのちです

それがわたしのいのちです

この詩にふれましたとき、私は身のふるえる思いをいたしました。自分の人生のなかで時間と

いうのはここにしかないと思っておりましたが、そうではないのですね。太陽の寿命は百億年だそうです。現在は五十億年たっているのだそうです。地球はそのなかで四十六億年、人類の歴史は三千万年から五百万年といわれます。そして釈尊は二千六百年、イエス・キリストは千九百九十三年。私たちはどうでしょうか。ここにいらっしゃる皆さんはだいたい十代の後半の方が多くではないかと思えます。しかし、私と違って皆さんには将来が開かれています。それだけに、そういう悠久の歴史のなかの生命いのちとして、ぜひご自分の生命を大事にしてください、磨いていただきたいと思えます。それは私の願いだけではなくて、ご両親の願いでもあります。うし、お祖父さん、お祖母さんの願いでもありましょう。いずれにしても、一期一会という言葉もありますが、一瞬、一瞬を大事に生きていただきたいと思えます。一瞬を一刹那という言葉でも申しますが、一刹那も実はサンスクリットなのです。一刹那という時間は七五分の一秒だそうです。ちなみに一日というのは八六一六四、〇九二秒だそうです。「時間」に關して百億年から一刹那までを申しあげてみました。

最後に、ある方の歌をご紹介して話を終えたいと思えます。

美ははしき色あれど 香のなき花のごと いのちなき言の葉 いとさみしかり

楽音教仏

これは申し上げなくてもおわかりと思いますが、自分と出会う、人と出会う、そのときに、  
生命ある言葉のひびきを聞き取っていきたい、生命ある言葉を語り伝えたい、そういう願いが  
大事ではないかと思えます。

以上で導入部を終わりたいと思いますが、これは次に演奏いたしますための大事な基本姿勢  
ですから、時間を長めに頂戴しました。では、本日のむすびであり、結論に当たります仏教讃歌  
の演奏でしめくりたいと思えます。

仏教讃歌演奏 大谷楽苑選定『讃仰歌』より 演奏 真美アンサンブル

人の世の 八谷秋剣作詞 服部 正作曲

あさのおまいり 大谷智子作詞 中田喜直作曲

お花祭 大谷智子作詞 木下 保作曲

みめぐみの 河合恒人作詞 古関裕爾作曲

みほとけは 仲野良一作詞 信時 潔作曲

仏 教 音 楽

全員合唱

光華女子学園の歌

大谷智子作詞

信時 潔作曲

恩徳讃Ⅱ

親鸞聖人和讃

清水 脩作曲

三帰依(パトリ文)

いのち

藪田義雄作詞

下総皖一作曲

みほとけは

仲野良一作詞

信時 潔作曲

附

星めぐりの歌

宮沢賢治作詞

宮沢賢治作曲

—一九九三・五・二七—